

(2) 「重さ」の集計及び分析について

評価項目	重さ											
	はかりの読み取り	針の記入	はかりの選択①	はかりの選択②	はかりの選択③	はかりの選択④	理由説明	ポウルの重さ	合計の重さ	求め方	式	答え
問題番号	2-①	2-②	2-③	2-④	2-⑤	2-⑥	2-⑦	2-⑧	2-⑨	2-⑩	2-⑪	2-⑫
正答率	85.9	81.9	90.0	88.7	91.5	73.2	21.0	79.7	83.5	50.9	64.2	60.4
誤答率	13.1	9.0	9.7	11.0	8.3	22.1	64.9	16.6	12.8	36.4	28.0	31.3
無答率	1.0	10.0	0.3	0.3	0.2	4.7	14.1	3.7	3.7	12.6	7.8	8.3

ア 計器の目盛りを正確に読むこと（問題番号2-①②）

設問①②は、計器の目盛りを読んだり、重さを指し示す針を記入したりする問題である。ここでは、基準となる1目盛りが何gであるかをしっかりと読み取ることができているかをみることができる。ここでの正答率はどちらも8割を超えていた。概ね、重さを測って数値を読み取ることができていることが分かる。授業において、実際に様々な物の重さを測り、目盛りを正しく読む活動を大切にされた指導を重ねていることがうかがえる。

イ 対象物に応じた適切な計器を選択すること（問題番号2-③～⑦）

設問③④⑤は、対象物にあった計器を選択する問題である。ここでは、計器の最大値に着目して選択する力をみることができる。この設問の正答率は約9割であった。このことから、児童は、どれくらいの重さまで測ることができるかによって計器を選択しているということが分かる。

しかし、同様に計器を選択する問題であるにもかかわらず、設問⑥の正答率は約7割と低くなっている。更に、その理由を問う設問⑦の正答率は約2割であった。これは、設問③④⑤と異なり、計器の最小値に着目して選択する力をみる問題であったことが原因と考えられる。上記の設問①②の結果からも、重さを読み取るために1目盛りの大きさを考えることはできても、測定結果から計器を判断するという逆思考が必要とされる場面では1目盛りに着目できていないことが分かる。計器を選択する際には、「何kgまで測ることができる（＝最大値）」だけでなく、「どれくらいまで細かく測ることができるか（＝最小値）」ということも意識させていく必要がある。

ウ 直接測定できないものの求め方を考えること（問題番号2-⑧～⑫）

設問⑧⑨は、設問①②と同様に、計器の目盛りを読む問題であり、正答率は約8割と高い。しかし、直接測定することができないものの求め方を問う設問⑩～⑫については、正答率が5～6割と低い。このことから、全体の重さから一部の重さを引くことで残りの重さを求めることができる、ということが理解できていないことが分かる。これは、授業において重さの計算を扱うことはあっても、それが日常生活での具体的な場面と結び付いていないことが原因と考えられる。重さの授業においては、測定させるだけでなく、それらを用いて筋道立てて考えさせる問題場面も取り扱う必要がある。その際、児童の日常生活にできるだけ近い場面設定をすることが大切であり、そのことで、児童は、経験と結び付けて理解することができると思われる。